

平成14年度日本東洋医学会東海地区
専門医制度委員会学術講演会
講演要旨集

平成15年2月9日(日)

於：名古屋大学医学部鶴友会館

これからの漢方研究への期待

慶応義塾大学医学部東洋医学講座

渡辺賢治

漢方医学を取り巻く環境はめまぐるしく変化している。特に教育の面においては整備が進んでおり現在では全国80大学医学部、医科大学のうちの70校以上で漢方の教育が行われるようになった。しかしその一方で研究に対する基盤整備は大きく遅れている。特に最近NIHが漢方や伝統中国医学(TCM)に対して研究費を助成する方向で進んでいるが、特に臨床的に有用であるかどうかのEBM (evidence based medicine) が求められている。

EBMは従来経験的であったり、習慣の追随からなされていたような臨床判断に対するアンチテーゼとしての必要性が提唱されて以来、医療経済や医療政策など幅広く応用されてきている。従来集団を対象に効率を重んじてきた西洋医学にはこのEBMの考えはマッチするところが多く、最近では多くの臨床研究が行われるようになってきている。

それに対し、漢方医学は経験に基づいて発達してきた医学であり、大規模な臨床研究はあまり為されていない。漢方薬の研究の難しい点は漢方医学そのものが個人差を重んじる医学体系であることによる。それ故に画一的に薬を用いる臨床研究は為されにくい、という指摘である。そこで考え出された手法がN of 1 trialである。この手法は個々の例の経過に重きを置き、投与時、非投与時の比較検討する手法であるが、病態が一定しているような慢性疾患には適応となる。その一方で病態によってはある程度元の個人差がマスクされ、一定の状態を作り出すことがある。現在我々は個人差を考慮した漢方の臨床が可能であるか、という挑戦をいくつか行っているがこれからの漢方研究のあり方についての問題提起を含め発表させていただく予定である。